

# 2

[報告 | report]

## 韓国記録管理 人材育成の現場

「学習院大学東洋文化研究所 グローバル東アジア学40」派遣報告

Visiting Report on Global Studies of East Asia 40 Project of the Research Institute for Oriental Cultures,  
Gakushuin University

齋藤柳子 | Ryuko Saito

### 1 — はじめに

私は学習院大学東洋文化研究所、「グローバル東アジア学40」の助成金を受けて、2011年8月1日から7日間、韓国の明知大学に派遣され、記録管理に携わる人材の育成と推進体制、精神力の継承、等について、直接見てまわる機会を得た。同大学記録情報科学専門大学院で教えている理論を、具体的にどのように記録管理の現場で実務展開しているか、本誌で紹介することで、日本における今後のレコードマネジャーやアーキビスト養成の参考になればと思う。

### 2 — 派遣内容

#### ①派遣先

明知大学 記録情報科学専門大学院 記録管理専攻  
(韓国ソウル市西大門区南加佐洞50-3)

②派遣期間 | 2011年8月1日[月]—7日[日]

③受入者 | Dr. キム・イッカン、Dr. イム・ジニ

#### ④目的

明知大学は、1999年アーカイブズ科学研究科大学院を設立し2006年に「記録情報科学専門大学院」に名称を変

更し、理論と実務を一体で経験する教育体制が敷かれている。さらに、大学と共同付設の「デジタル・アーカイビング研究所」における記録管理の受注案件の展開方法について、以下の4点を事前に質問項目として送付し、研究を進めた(4項目は、筆者の修士論文参照)。

- 記録管理導入の受注案件から、具体的な展開方法と導入結果について
- 記録の研究・保存を通じて民主的社会的発展の土台を確立し、これを後世に伝える仕事を担うという、精神論の伝え方について
- 多くの人材をアーカイブズやレコード・マネジメントの分野に輩出している専門大学院の、実務者としてのトレーニング体制について
- 「リテンション・スケジュール表」の構築手法とアーカイブズに導く「評価・選別」の考え方について

### 3 — 考察と感想

事前研究で、韓国の記録管理の状況は、日本よりも先進的であると認識してはいたが、実際にプロジェクト現場を見学し、経過説明を受けてみると、従事するアーキビスト養成の手

堅さと推進体制に驚嘆した。

明知大学では「記録情報科学専門大学院 記録管理専攻」の修了生に、受注したプロジェクトの推進を担当させている。その現場で体験する様々な問題点の解決は、学内の「デジタル・アーカイビング研究所」において、理論上の検討がなされ、ベスト・プラクティスへ導く手法を修了生に示しながら、一人前のアーキビストに育て上げていく様子を見せてもらった。

「新人の時、記録管理[1]に取り組もうとする動機は何であったか」とディスカッションタイムで質問したところ、人により答えは様々であったが、究極の答としては、「記録管理を普及させることにより、対象となる人、場所、組織、国家、思想、等の社会的価値観を高めることができる、ということに意義を感じる」ことが着地点になるであろうと、Dr. キム・イッカンにまとめられた。これこそが、記録管理に取組む精神論であると思った。

確かに未だ知られていない偉人、遺産、組織、国の施策、人々の生活、等が、資料が不十分で事実が解明されない状態であった場合、資料が後年発見され、整理・分析・公開された途端、衆目を集め、世評を得、しかも人々に感動を与えている例は限りなくある。明知大学では「記録を守り、記憶を伝える」という控え目な言い方ではなく、「社会的価値観を高める」という攻めの姿勢を示していた。

この背景には、民主化運動を通じて勝ち得た、1999年「公共機関の記録管理に関する法律」の成立があることを忘れてはならない。記録を管理し、情報公開を推進することと、国政のアカウントビリティが確保されるようになった。

「男性は徴兵制度で国家を考える時期があり、精神はゆるがないのではないかと私はさらに質問した。「いや、その約2年前の間に叩き込まれた思想を、民主的な考えに戻すのに、われわれ大学人はどれだけ苦勞をしているか」という答えが返ってきた。満19歳までに徴兵検査を受けるため、一般的には大学で1・2年まで過ごしてから休学して兵役に就くケースが多いようで、除隊して大学に復帰した「復学生」が大変多く、韓国社会に内在する冷戦構造を、自分たちの手で切り崩していく韓国民主化運動の精神の継続達成には、記録管理も絡めて苦勞があることが伺えた。

このような普及を図るには、記録管理の世界に携わる人材を集め、教育していかなければならない。教育したからには、仕事を与えなければならぬ。明知大学では、それが一貫して大学で行われている。しかも大学院だけが取り組んでいるのではなく、学部の教授からも受注の糸口が伝えられ、大学

院と学部が一体となって受注交渉に取り組んでいる。今回見学をさせてもらった、「財団法人 韓国棋院」の受注に至る経緯は、次のようである。

学部の文化財専門の教授が「囲碁は中国、日本、韓国で盛んであるが、トップレベルを維持するには、国の無形文化遺産として過去の技能と記録を継承維持すべきであるが……」とDr. キム・イッカンに相談した。韓国棋院の地下書庫の現状を検分したところ、劣化が進んでいる記録類について早急に保存対策が必要であるという課題が浮上し、その教授と共に文化庁に掛け合い、記録管理の重要性を提案したところ、案件が受注できたそうである。

地下書庫の現場では、プロジェクト担当者(修了生)2名と現役大学院生2名が、1945年以降の定期刊行物に掲載された「特集記事」に関する目録を作成中であった。二つ目の作業として、対局棋譜(囲碁の勝負結果)をデジタル化しデータベースを作成すること、三つ目に大量に溜まった写真やスライドを整理すること、が課題である。写真は誰が写っているのか不明であるものが多く、主なものはデジタル化してウェブにアップし、“Who’s who”で一般から名乗りをあげてもらうか、情報を書き込んでもらいながら、一点一点、貴重な画像を整理していくという。このようなアイテム単位での作業を地道に行い、かなりの工数が予想されても整理していく、という意気込みであった。

とりえず先に、湿度でカビが発生し劣化が進行している地下書庫の記録類の整理に着手し、その後、デジタル化しデータベースを作成し、さらに法人としての現用記録の体系化も行わなければならない。このプロジェクトは、オフィス移転が途中で行われる予定であり、それに合わせてレイアウト設計、新規設備(空調設備、什器備品選定、等)と保存環境の改善整備も伴うため、約3年間のロングラン・プロジェクトだそうである。大学だけでなく、各分野の外部専門家(物理的処理の専門会社、等)と協力して、プロジェクトを運営していくよう、準備中であった。

プロジェクトの納期管理は厳しく、担当者である修了生のコスト意識を鍛えていく。大学の研究というよりは、まるで企業のようなのである。プロジェクト担当者には給与(学生が都会で一人暮らしができる程度の給与)を支払い、真剣勝負で取り組ませる。博士課程を修了しても正式な職業が見つからない「ポスドク」にならないように、大学が自ら受注した案件を修了生に担当させ、実務で鍛え、プロジェクト終了後は、そのまま当該組織へ人材を送り込む可能性をつくり出している。



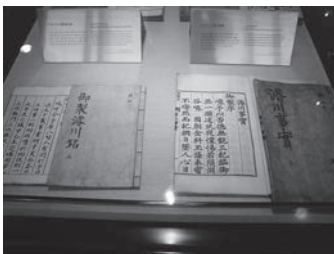
デジタル・アーカイビング研究所の前で



韓国棋院プロジェクト担当者(修了生)が目録作成中



ディスカッションタイム



18世紀の清溪川の記録(清溪川博物館)



清溪川(光化門付近)

8月1日[月]

[11:30]羽田空港発 → [14:00]金浦空港着 → [16:00-17:00]明知大学

Dr. キム・イッカン、Dr. イム・ジニに挨拶。学内の「デジタル・アーカイビング研究所」にて、主任研究員とプロジェクト担当の大学院修了生13人程のスタッフに自己紹介。今週の予定、用意された研究室の利用方法、ドアのセキュリティシステム、建物の入館閉館時間について説明を受ける。

8月2日[火]

[9:30-18:00] 研究室で4日[木]に実施予定のプレゼンテーションを英語に翻訳

8月3日[水]

[9:20-12:00]

- 記録管理プロジェクト「財団法人 韓国棋院」の現場を訪問
- 地下書庫の文書保存管理状況と目録作成作業を見学
- 劣化した資料類のプリザーベーションの方法についての打ち合わせ(ハングル)に参加  
出席者: [韓国棋院]普及チームマネージャー、プロジェクトマネージャー、スタッフ/[物理的処理の専門会社「BIOMIST」]Dr. キム・キーヒョン/[明知大]Dr. キム・イッカン、Dr. イム・ジニ、プロジェクト担当者2名
- プロジェクト案件の受注までの経過をDr. キム・イッカンより伺う。

[13:30-17:30] 大学研究室に戻り、プレゼンテーションの翻訳を継続

8月4日[木]

[10:00-11:00] 2つのプレゼンテーション実施

[テーマ]①「3.11は日本のシステムを変える——この被災を捉えアーキストは何ができるか」

②「レコード・マネジメントの導入からアーカイブズへ」

出席者: Dr. キム・イッカン、Dr. イム・ジニ、主任研究員4名

[11:00-12:00] 質疑応答

[13:00-15:00] 訪韓前に送付した4つの質問に対する回答を受け、ディスカッションタイムでは、日本語でコミュニケーションが許され、Dr. キム・イッカンがハングルで出席者に通訳。

[19:00-20:30] ソウル都心にて、韓国アーキスト・レコードマネージャー協会(KARMA)——日本の全史料協のような団体主催の教育プログラム「記録管理に将来携わるためのガイドライン」の第3回目の講義を、Dr. イム・ジニが実施、約1時間半見学(ハングル)。筆者は自己紹介で記録管理の面白さをアピール(英語)。

出席者: 他大学院生や記録管理に従事している20-30歳代の社会人、約20名

8月5日[金]

東洋文化研究所宛の「派遣報告書」をまず英語で作成し、記入内容に齟齬がないか、Dr. イム・ジニに内容のチェックを受ける。

8月6日[土]

[10:00-15:00] 清溪川(チョンゲチョン)を見学

現大統領イ・ミョンバクがソウル市長時代、1958年から暗渠であった河川を2003年から2年3か月におよぶ復元工事の後、都心の生態河川として2005年に再生した、今では市民の憩いの場、ビオトープ。最下流にある清溪川博物館で日本語の資料を入手し、上流へ向かい東大門付近までの畔を歩く。

8月7日[日]

[9:30-11:30] 清溪川の上流、光化門付近から、前日中断した東大門付近まで下流に向かって歩き、全行程踏破 → [16:25]金浦空港発 → [18:30]羽田空港着

この方法によりデジタル・アーカイブ研究所としても、文献からだけの理論ではなく、現場で改良された現実性のある理論に仕上げるができる。理論の基になる情報は、主任研究員があらゆる角度から収集し、体系付け、いつでも利用できるように準備している。このバックアップ体制により、プロジェクト担当者は2-3のプロジェクトを並行して進めることができるらしい。

仕事が見つかるのであれば、若い人材も集まるわけである。明知大学だけでなく、他大学生やすでに社会人になった者も志願できるよう、教育プログラムは夜間、学外でも行われていた。見学したのは、韓国アーキビスト・レコードマネジャー協会(KARMA)主催の出張講義である。7月21日から毎週木曜日、6週連続で、ソウル都心で開催されていた。

講義のプログラムは「法と政治政策」「公的機関のレコード・マネジメントとアーカイブズ」「記録管理基準表」「デジタル・アーカイビング」「コミュニティ・アーカイブ(ソンミ村)」「レコード・マネジメントとデモクラシー」であった。講師陣はその道の第一人者で、明知大学だけでなく、他大学の教授も協力している。すでに実務についている明知大卒業生のアーキビスト達が、志願者の相談相手になり、講義終了後、車座(オンドルの床にすわる習慣)になって話し合いをしていた。出席者の中には、記録管理の話は初めてという参加者もいるらしいが、皆、熱心に講義を聞き、質問をしていた。夜間、仕事が終わってから集合し、講義終了後さらにディスカッションを重ねている若者の姿を見て、私は韓国の「勢い」を感じた。

この派遣プログラムに際し、私は2つのプレゼンテーションを英語で行った。派遣4日目のディスカッションタイムで話し合われた内容から、記録管理における解決課題は、日本も韓国も変わらず、世界共通であることが分かった。

例えば、訪韓の1週間前にソウル市は大雨で地下鉄まで浸水し、ソウル市庁の地下書庫も水浸しになった。それで、東日本大震災で被災した公文書のプレザーベーションの話を紹介すると、その方法に関心が集まった。私は水損処理のことだけでなく、リスク管理として、組織におけるバイタル・レコードの認定についても触れた。

さらに、現在、私が取り組んでいるプロジェクト、「高エネルギー加速器研究機構の法人文書管理」について説明をしたところ、論点の後半で触れた「研究開発分野におけるレコード・マネジメント」については、韓国でも課題となっているそうである。研究開発は各分野の専門性が極めて高く、記録管理で初めて遭遇する内容もあり、機能分類の設定は多

様化して標準化しにくく、試行錯誤している、ということが話題となった。

こちらの質問に対しては、予め回答を準備して頂いた。しかも自動翻訳ではあるが、日本語で提出してくれた主任研究員もいて、Dr. キム・イッカンはその心意気を誉め、自分が指示なくてもスタッフが真摯に取り組んでくれたことに喜んでおられた。私はハンゲルが理解できなかったが、英語でコミュニケーションが取れたので不自由はしなかった。聞くところによると、韓国の高校生は、中国語と英語が必修科目で、その上、日本語の話し言葉は、漫画で覚える人が多いらしい。アジアの3言語を話し、英会話もできる韓国の若者は、確実にグローバル化に向かっている。「グローバル東アジア学40」の派遣主旨としても、世界を見据えた勉学や研究を行い、海外で発言できるように、自分を鍛えておくべきであると思うようになった。お世話になった明知大学の皆様、このような派遣の機会を与えてくださった東洋文化研究所に、紙面を借りて改めて感謝を申し上げたい。

1 — 韓国でいう記録管理とは、レコード・マネジメントとアーカイブズの両方を一体化して実施することを指している。